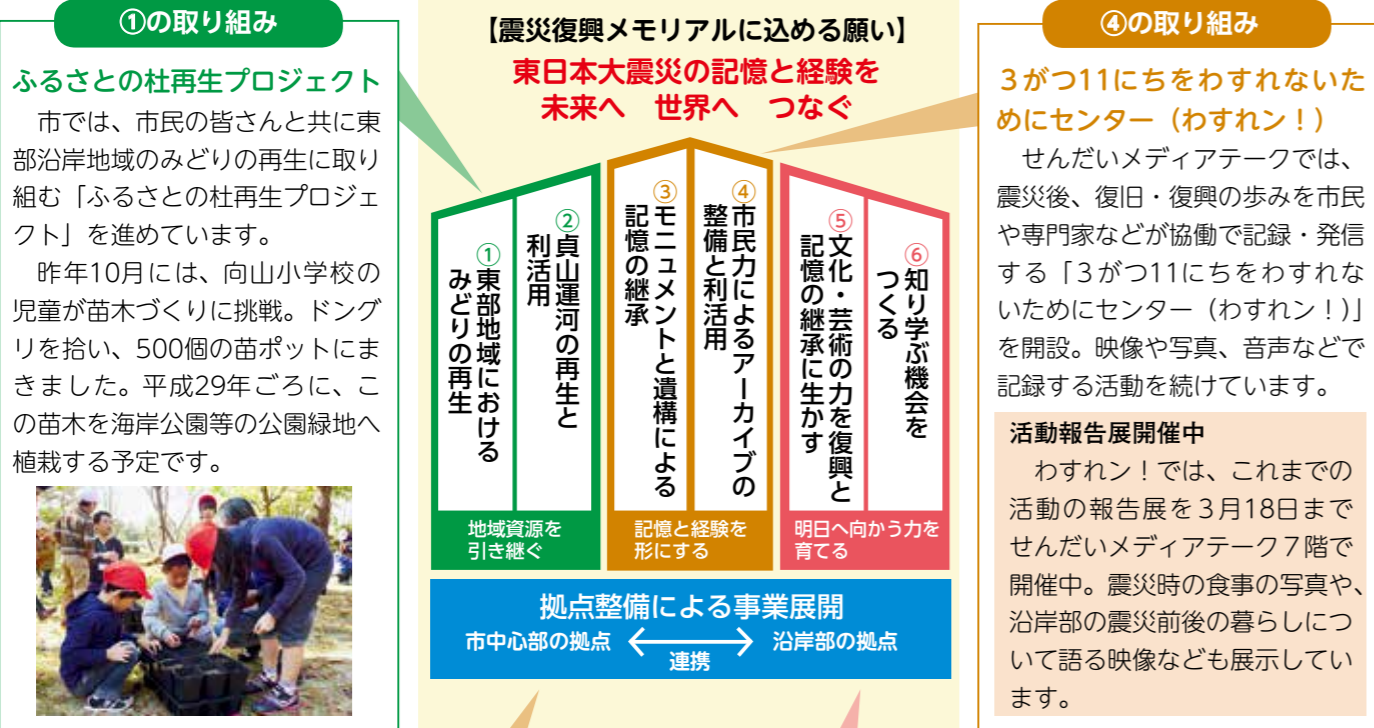


震災復興メモリアル事業の方向性

報告書で示された六つの取り組みなどの概念図と、現在取り組んでいる事例をご紹介します。



③の取り組み
荒浜小学校校舎と住宅基礎群
市では、津波が4階建て校舎の2階床上約40cmまで達した荒浜小学校校舎と、津波襲来後、建物の基礎のみが残った周辺の住宅基礎群を、一体で震災遺構として保存することを検討しています。
▶荒浜小学校（上）と住宅基礎群

⑥の取り組み
伝える学校—3.11オモイデツアー—
市と市民団体が協働で実施するプロジェクト「伝える学校」。本年度は、そのプログラムの一つとして、受講生が震災前の沿岸地域の暮らしや思い出を人々に伝える「3.11オモイデツアー」を行っています。
受講生の皆さんは、地域の概要などを講義や現地訪問で熱心に学び、沿岸地域を回るツアーを企画。昨年10月と11月に実施し、計13人を案内しました。

▲昨年のツアーでは、地域の方から被災体験等も伺いました

◆3月14日(出)にもツアーを行います。参加方法等について、詳しくはお問い合わせください
NPO法人20世紀アーカイブ 仙台 ☎387-0656

拠点整備による事業展開
地下鉄東西線荒井駅の駅舎内に「沿岸部の拠点施設」を整備します
市では、市内外の方が東部沿岸地域を訪れ、被災の実態を体感するとともに、地域の魅力に触れるための出発点となるよう、現在建設中の荒井駅の駅舎内に拠点施設を整備します。
この拠点施設では、震災の被害と復興の記録や、地域の魅力等を紹介する展示のほか、沿岸地域を実際に探訪するプログラムの提供、震災の記憶を伝える方々の活動拠点としての機能などを備える予定です。地下鉄東西線の開業に合わせて、12月の開設を目指します。

▲荒井駅の駅舎と駅前広場（イメージ）

この特集に関するお問い合わせは、震災復興室 ☎214-8586



平成26年10月撮影

震災の記憶と経験を つないでいこう

私たちに大きな試練を課した東日本大震災。この記憶と経験を未来へ、そして世界へとつなぎ、将来にわたって多くの方の命を守るため、市は震災復興メモリアル事業を進めています。

時を経て、災害から命を守るために
市では、仙台市震災復興計画の重点推進事業「百万人の復興プロジェクト」の一つとして、震災の脅威と復興への取り組みを後世に継承する震災復興メモリアル事業に取り組んでいます。
メモリアル事業の推進に当たり、平成25年7月に市民団体や学識経験者で構成される検討委員会を設置。約一年半にわたる議論を経て、昨年12月25日、事業の在り方をまとめた報告書が、市に提出されました。
市では今後、この報告書を基に、市民の皆さんと共に事業を進めていきます。

取り組み内容や事業の進め方の提言が示されました
報告書では、メモリアル事業に取り組む意義を、①仙台藩のまちづくりを今に伝える沿岸部の松林や居久根、真山運河などの「地域資源を引き継ぐ」、②犠牲となられた方々や、自然災害の脅威を伝えるために「記憶と経験を形にする」、③心の復興を支えた文化・芸術の力や、震災から学んだことを未来や世界の防災につなげる「明日へ向かう力を育てる」の三

つとし、その実現に向けた六つの取り組みが示されています（3ページ参照）。また、各取り組みをつなぐ拠点の整備や、多様な主体との協働による事業推進の必要性も示されました。

◆各取り組みをつなぐ拠点整備
メモリアル事業の実施に当たって、六つの取り組みを有機的に結び、継承していく拠点が重要です。また、仙台は宮城・東北の玄関口として、被災各地への訪問につなげる役割を担うことも重要です。そこで、人や情報が集まる中心部に「震災の記憶と経験を収集・編集・発信する拠点」、沿岸部に「津波被害を受けた現地を訪れ、震災の記憶と経験を学び学ぶ沿岸部回遊の出発点となる拠点」を整備し、二つの拠点で分担・連携して事業を展開することが提言されました。

◆協働による事業推進
メモリアル事業は多くの分野や実施主体にまたがることから、推進の核となる組織と、多様な主体との協働が求められます。そこで、市が核となる組織を設置し、施策立案・実施、事業評価、国内外への発信を行うことが提言されました。また、多様な主体が知恵を結集し、市民一人一人の記憶と経験をつなげる手法を生み出していくことの重要性が指摘されました。